

[論 説]

インドは脅威か？

India's Military Modernization is Not "concerned". Why?

長 尾 賢

序

昨今、日本周辺を含む中国周辺の国々においては、中国の軍事力の近代化に対して警戒感が高まっている。しかし、中国とインドの軍事力の近代化については多くの共通点があるにもかかわらず、インドの軍事力の近代化に対して警戒感が高まっている状態ではない。本稿の目的は、なぜ中国は警戒感を抱かれ、インドは警戒感を抱かれていないのか、その理由を分析しようというものである。

1. 中国とインド、軍事力の近代化における共通性

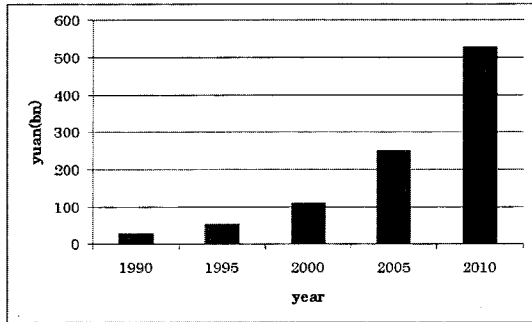
この問題に取り組むには、まず、なぜ中国の軍事力の近代化に対して、特に日本を含む周辺国が警戒感を示す結果になったのか、その理由について分析する必要がある。日本の『平成 23 年度防衛白書 日本の防衛』を参考にすると以下三つの理由があるものと考えられる。

(1) 急速な軍事力の近代化

最初の理由は、中国の軍事力の近代化が「早すぎる」ことである。防衛白書には、「中国の公表国防費は、引き続き速いペースで増加している。公表国防費の名目上の規模は、過去 5 年間で 2 倍以上、過去 20 年間で約 18 倍の規模となっている」¹と記述されており、急速であることに注目し警戒していることがわかる（図 1 参照）。

(2) 海・空軍中心の近代化

二つ目の理由は、中国の軍事力の近代化が、中国が大陸国家であるにも



出典：防衛省『平成 23 年度防衛白書 日本の防衛』(http://www.clearing.mod.go.jp/hakusho_data/2011/2011/index.html) (最終確認 2012 年 2 月 7 日)

図 1 中国の公表国防費推移

かかわらず、海・空軍を中心としたものであることである。海軍や空軍を利用することで、中国は、より広い範囲に軍事力を投射できるようになる。日本の防衛白書には「中国は、核・ミサイル戦力や海・空軍を中心とした軍事力の広範かつ急速な近代化を進め、戦力を遠方に投射する能力の強化に取り組んでいる」²と記述している。また、この中国の「軍事」に関する項目には「海洋における活動」と題した、中国の海洋活動を特に取り上げた項目があり、その中で「近年、中国は、海洋における活動を拡大・活発化させており、わが国の近海においては、何らかの訓練と思われる活動や情報収集活動を行っていると考えられる中国の海軍艦艇や、海洋権益の保護などのための監視活動を行う中国の公船が視認されている」³と警戒感を示している。

(3) 目的の不透明性

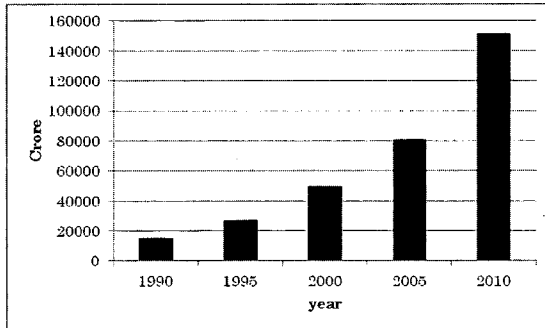
三つ目の理由は、中国の軍事力の近代化の目的が不透明であることである。日本の防衛白書には中国の「軍事」に関して「軍事に関する透明性」

〔論 説〕

という項目が設けられており、その中で、「中国は、従来から、具体的な装備の保有状況、調達目標および調達実績、主要な部隊の編成や配置、軍の主要な運用や訓練実績、国防予算の内訳の詳細などについて明らかにしていない。」⁴「国際社会の責任ある大国として望まれる透明性は依然として確保されていない。」⁵と記述し、中国の軍事力の近代化に対して強い警戒感を抱く理由として大きく取り上げている。

以上が、日本の防衛白書からみた、中国の軍事力の近代化が周辺国から警戒感を招いている主要な理由と考えられるが、このような指摘は、日本に限るものではなく、例えば、米国防大学国家戦略研究所も中国の軍事力の透明性についての研究の中で、中国軍は、透明性を高めると表明しながら、実際には不十分なままであることを指摘しているため⁶、中国の周辺国においても中国の近代化に対する警戒感の有力な理由になっているものと考えられる。

ただ、非常に興味深いことが一点ある。それは、この中国の軍事力の近代化が警戒感を招いている三つの特徴は、現在進められているインドの軍事力の近代化の特徴としても指摘し得ることである。インドの国防費は急速に伸びているし（図2参照）、インドは海・空軍に重点を置いた軍事力の近代化を進めている。また、インドはある程度重要な情報を公表しているものの、軍事力の近代化の意図が不明確であるとの指摘もあり、例えばアメリカにおけるインドの戦略研究で著名なスティーブン・ファイリップ・コーエン教授の書籍のタイトルは“Arming without Aiming: India's Military Modernization（目的無き軍拡：インドの軍事力近代化）”⁷となっている。そのため、理論上、インドの軍事力の近代化についても警戒感をもって見るべきだという結論になるはずである。



出典：Ministry of Defence of India, *Annual Report*, Web Source: <http://mod.nic.in/reports/welcome.html> (accessed on 7 February 2012); *From Surprise to Reckoning: The Kargil Review Committee Report*, Saga Publications, 2000, pp.162-163.

図2 インドの公表国防費推移

しかし、実際には、インドの軍事力の近代化について警戒感を表明している国は、中国とパキスタン以外にあまりない状態である。そのため、なぜインドの軍事力の近代化は、中国の軍事力の近代化と同じ扱いを受けないのか、という点について、疑問が生じるのである。次の五つの理由があるものと考えられる。

2. インドが警戒感を招いていない五つの理由

1. 政治体制

民主主義国家は他の体制の国家よりも信用され易い傾向がある。これは言論の自由が国家間の信用を高めるからである。

相手の国の軍事戦略について理解しようとする際を考えると、研究者は、政府の文書を読んで理解しようとするだけではなくて、相手国の政府高官や研究者と意見交換したり、著作を読んだりしながら、これを理解

〔論 説〕

しようとする。しかし、中国から来た研究者に軍事関連の質問をすれば、彼らの答えは、政府発表そのものを述べるに留まることが多い。中国の研究者は自国の軍事について政府に批判的な発言をすることが許されていないからである。このような批判的精神の欠如は、中国周辺の国々が中国の軍事力の近代化の真の意図について警戒感を抱くようになる原因の一つであると考えられる。

一方で、インドの場合そのような制限は存在しない。例えば、BBCは2005年の調査で、インドではわずか1%の人しか自国の政治家を信頼していないという調査結果を公表した⁸。これは一見すればインドの民主主義が失敗しているように見えるが、実際には、インド人が政治において批判的精神を発揮して正直に不満を述べている数字である。このような言論の自由が担保されているからこそ、インド人の意見は、率直な意見として信頼され、警戒感を減ずるのに役立っているものと考えられる。

2. 戦略

二つ目の理由は、インドが歴史的に軍事力の使用を抑制してきたことが、インドの信頼を高めていることである。以下の表1にあるのは、インドが実施した軍事作戦のリストを三つの観点から分けしたものである。

一つ目の観点は、どちらが先に行動したかで、先に行動した場合は「先攻」、後に行動した場合は「後攻」という形で分けた。

二つ目の観点は作戦の種類についてで、五つの種類に分けた。

(1) 限定戦争

限定戦争とは目的、地域、手段等厳しく制限された戦争を指す。全面戦争か限定戦争かという定義には曖昧な部分があるが、第二次世界

大戦後、全面戦争が生起する可能性は非常に小さくなったため、本稿では、第二次世界大戦後の戦争はすべて限定戦争として扱うこととした。

(2) 強制外交

強制外交とは、一部武力の使用を伴った一種の外交的な説得である。そのため強制外交は、戦争や、抑止とは区別されるべきである。戦争は軍事作戦によって相手を物理的に強制するものであるし、抑止は「まだ開始されていない行動の実行を思いとどませようとするものであり、他方、強制外交は、敵対者によってすでに引き起こされた行動を覆そうと試みるもの」⁹だからである。

(3) 平和執行

紛争状態にある地域に介入して、平和な状態を強制的に作り出そうという試みをさす。

(4) 平和維持

平和維持活動は、戦闘に参加している当事者の合意の下で、その平和を維持するための軍事作戦である。

(5) 対反乱作戦

国内の反乱またはテロ等に対して、その秩序を維持するために行われる作戦をさす。

三つ目の観点は軍事作戦が行われた地域が「国内」か「国外」かである。このリストはインドの軍事作戦が相手の行動に応じ後攻で始まるケースが多く、特に1972年以降、平和執行、平和維持活動以外の目的で、国外に軍隊を送っていないことを示している。インドの軍事力の使用を抑制する戦略は一貫したものであり、諸外国から信用される要素になっているも

表1 インドが実施した軍事作戦リスト

	先攻、後攻	作戦の種類	作戦地域
ジューナガール併合 (1947)	先攻	限定戦争	国外
第一次印パ戦争 (1947-48)	後攻	限定戦争	国外
ハイダラーバード併合 (1948)	先攻	限定戦争	国外
インド北東部反乱 (1956-現代)	後攻	対反乱作戦	国内
ゴア併合 (1961)	先攻	限定戦争	国外
印中戦争 (1962)	後攻	限定戦争	国内
カッチ湿地国境紛争 (1965)	後攻	限定戦争	国内
第二次印パ戦争 (1965)	後攻	限定戦争	国外
ナチュラ事件、チョーラ事件 (1967)	後攻	限定戦争	国内
毛沢東主義派反乱 (1967-現代)	後攻	対反乱作戦	国内
第三次印パ戦争 (1971)	先攻	限定戦争	国外
シアチェン氷河国境紛争 (1984)	先攻	限定戦争	国内
パンジャブ州独立運動 (1984-92)	後攻	対反乱作戦	国内
ファルコン作戦、チェッカーボード演習 (1986-87)	後攻	強制外交	国内
ブラスタクス演習 (1987)	先攻	強制外交	国内
スリランカ介入 (1987-90)	先攻	平和執行	国外
モルディブ介入 (1988)	後攻	平和執行	国外
カシミールにおける武装蜂起 (1989-現代)	後攻	対反乱作戦	国内
1990年危機 (1990)	後攻	強制外交	国内
カルギル危機 (1999)	後攻	限定戦争	国内
パラカラム作戦 (2001-02)	後攻	強制外交	国内
国連平和維持活動 (1947-現代)	後攻	平和維持	国外

のといえよう。

3. 軍事的能力

第三にインドの軍事的な能力は現時点では警戒感を招くほどではないからである。インドは百万人を超える陸軍を保有しており、その点では明らかに軍事的な大国といえるが、実際には、インドの軍事力を高い山脈とイ

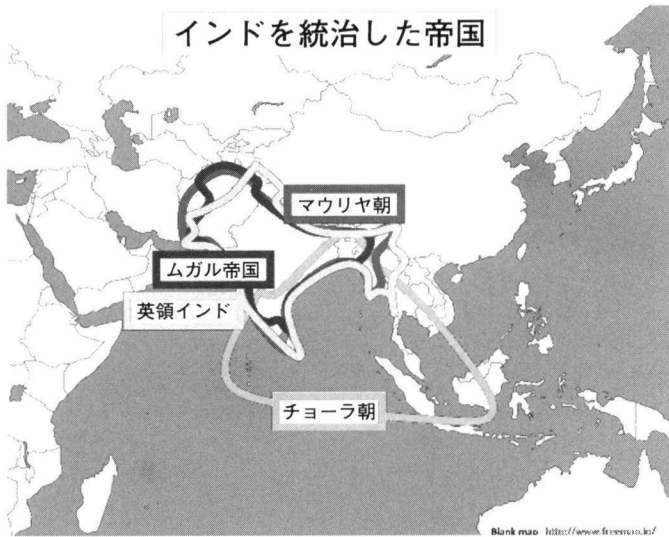


図3 インド史における帝国の領土

インド洋で隔てられた南アジアの外に展開させるには、百万人の陸軍力だけでは不十分であり、諸外国が警戒感を招く状態にはないといえる。そのことは、南アジアの歴史をみるとわかる。

南アジアの歴史の中では、三つの帝国が現在のインドと同様の広い国土を所有した。マウリヤ朝、ムガル帝国、英領インドである（図3参照）。この三つの帝国の領土の範囲は極めて似通っており、現在のアフガニスタンとパキスタンの国境の山岳地帯、またはインドと中国の間の山岳地帯を越えて国境を拡大させることが出来ていない。陸軍の作戦は地形に大きく影響されるため、アフガニスタンや中国といったインドよりもはるかに標高の高い地域に対し、インドから攻めることは困難が多かったと考えられる。そのため、インドが強い陸軍力を保有している現状においても、インドがその陸軍力を南アジアの外に向けて投射することは想像し難い。

表2 インド、日本、中国の保有する主要な軍艦リスト

	インド	日本	中国
航空母艦 (ヘリ母艦)	ヴィクラマディッチャ (建造中)46129t ヴィ克蘭ト(建造中) 40642t ヴィラート(1)29161t	(DDH)183(建造中) 24000t (ひゅうが級(2) 19000t)	シラング級(1)59439t
巡洋艦、 駆逐艦、 フリゲート艦、 コルベット艦 (満載排水量 3000トン 以上)	コルカタ級(1)7112t P-15B(建造中)7112t デリー級(3)6808t シヴァリク級(2)6299t 改良型シヴァリク級 (建造中)6299t ラジプット級(5)5054t シヴァリク級(2)5300t タルワー I 型級(3)4100t タルワー II 型級(建造中) 4100t 改良型ゴダヴァリ級(3) 4521t ゴダヴァリ級(3)4277t ニルギリ級(2)3088t コルモータ級(建造中) 3105t	あたご級(2)10000t こんごう級(4)9500t しらね級(2)7200t あきづき級(1)6800t たかなみ級(5)6300t むらさめ級(9)6200t はたかぜ級(2)5900t あさぎり級(8)4900t はつゆき級(7)4000t	ゾブレメンヌイ級(4)8067t ルズボウ級(2)7112t ルヤング II 級(2)7112t ルヤング I 級(2)7112t ルーハイ級(1)6096t ルーファー級(2)4674t ルダ級(13)3729t ジャングハイ II 級(9)3963t ジャングハイ I 級(2)3963t
潜水艦	チャクラ級(1)9246t アリハント級(建造中) 7000t キロ級(10)3125t シシュマル級(4)1880t スコルベヌ級(建造中) 1732t	そうりゅう級(4)4200t おやしお級(11)3500t はるしお級(2)3200t	ジン級(2)8000t ジア級(1)6604t クイング級(1)?t シャング級(2)6096t ハン級(3)5639t ユアン級(4)3000t キロ級(12)3125t 改良型ゴルフ級(2)2997t ソン級(13)2286t ミン級(19)2147t

* () 内の数字は 2012 年初頭の推定保有数。(建造中)は 1 番艦建造中。

出典：木津徹編『世界の海軍 2012-2013』(海人社)

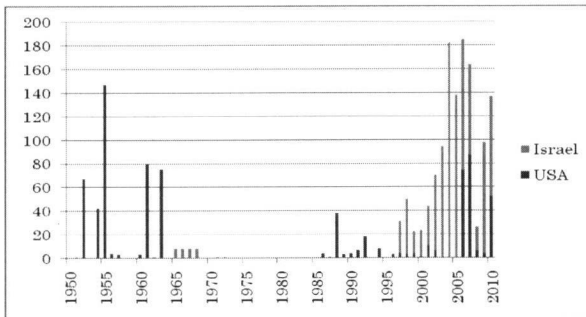
その一方で、インドの歴史には違う性質の帝国、チョーラ朝が存在する。チョーラ朝は、南アジアではインド南部の一部しか支配していなかったが、強力な海軍を保有し、南アジアの範囲を超えて軍事力を展開、東南アジア各国を支配した大帝国となった。ここからいえることは、インドが

その軍事力を南アジアを超えて展開させるかどうかは、海軍力に大きく依存しているといえる

しかし、現時点では、インド海軍の能力は限定的である。上記表2は日印中の保有する主要な軍艦（航空母艦、巡洋艦、駆逐艦、フリゲート艦、コルベット艦の内、満載排水量3,000トン以上の水上戦闘艦、及び、潜水艦のリスト）であるが、インド海軍はまとまった艦隊戦力を所有しているものの、日本や中国に比べ軍艦が小さい。一般的に言って、小さい軍艦は燃料や武器を多く積めず、遠洋航海能力が劣る。つまり現在のインド海軍の南アジアを超えて戦力を投射する能力は限定的であり、周辺国の警戒感を招くには至っていないといえるのである。

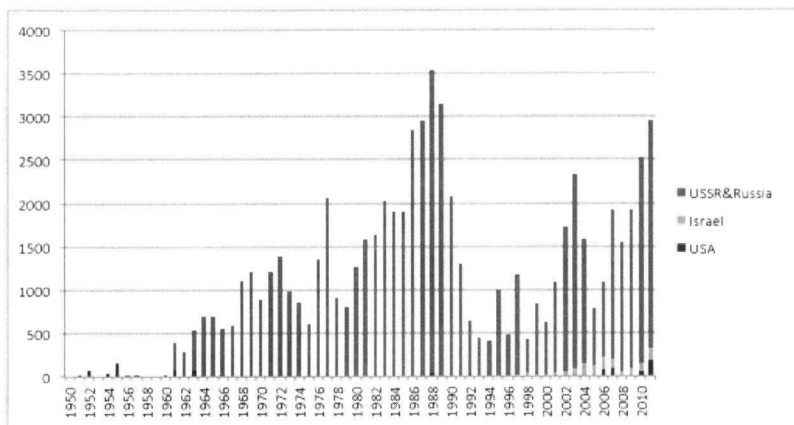
4. 外交

四番目はインドとアメリカの関係が現在非常によいことである。例えば、印米間では過去10年間で60回以上の共同演習を実施しており、こ



* 額は1990年を基準にストックホルム国際平和紛争研究所が独自に算定した米百万ドル単位。
 出典：Stockholm International Peace Research Institute database, Web Source: <http://www.sipri.org/databases> (accessed on 7 February 2012).

図4 アメリカ及びイスラエルよりインドが輸入した武器輸入額推移



*額は1990年を基準にストックホルム国際平和紛争研究所が独自に算定した米百万ドル単位。
 出典：Stockholm International Peace Research Institute database, Web Source: <http://www.sipri.org/databases> (accessed on 7 February 2012).

図5 露(ソ)・米・イスラエルの対印武器輸出額推移(全体の71%を占める)

これは同盟国ではない両国の関係を考えると異常に多い。また以下の図4及び図5を見てもわかるとおり、インドが輸入する武器全体の量におけるシェアはそれほど大きくないものの、1990年代半ばより、インドがアメリカ及びイスラエルから武器を輸入する量は増加傾向にある。このような良好な印米関係があるために、特に日本を含むアメリカの同盟国は、インドの軍事力の近代化を警戒しない理由になっているものと考えられる。

5. 「中国のライバル」としてのイメージ

五つ目は、インドの「中国のライバル」というイメージについてである。このようなイメージは、中国の軍事力の近代化が警戒感をもってみられている状況においては、インドの軍事力の近代化への警戒感を弱めているものと考えられる。

中国は大陸国家であるにもかかわらず、海・空軍力増強に力を入れ、その速度が急速であるが故に、東アジアの軍事バランスに変化が生じる可能性がでてきている。そのため、軍事バランスの変化を防ぐために、中国周辺各国もまた海・空軍力の増強を開始している。特に、潜水艦の増強は、潜水艦が治安維持、災害派遣や人道支援といった戦争以外の任務を実施できず、ただ戦争のみを遂行する兵器であるため、アジアの軍拡状況を反映した象徴的な事例となっている。例えば、日本は2010年、保有する18隻の潜水艦（訓練用2隻含む）を24隻まで増強する計画（防衛計画の大綱）を発表した¹⁰。ベトナムは2009年、6隻の潜水艦の購入を決め、本格的な潜水艦部隊を発足させる計画に着手した。マレーシアは2009年に2隻の潜水艦を購入し、シンガポールも5隻の潜水艦の内、2隻について新型のものに更新する予定である。インドネシアは現在2隻保有している潜水艦を、最終的には12隻にする計画を進めているし、フィリピンとタイも潜水艦部隊の創設を計画している¹¹。そしてオーストラリアは2009年、現在保有する6隻の潜水艦を12隻に増やすことを決めている¹²。

インドについては航空母艦3隻や原子力潜水艦4～5隻も含む計画を進めている。またインドはベトナムの潜水艦部隊創設も支援している¹³。このような環境においては、中国周辺の他のアジア諸国にとって、「中国のライバル」インドの軍事力の近代化は歓迎こそすれ警戒感をもってみるような事態ではないものと考えられる。

結

インドの軍事力近代化はなぜ警戒感をもってみられていないのか。インドの政治体制、戦略、軍事的能力、外交、イメージからみると、それ

[論 説]

は自然なことのようと思われる。インドは経済的、軍事的に近代化しているだけでなく、諸外国から信頼されているといえよう。問題は、インドがこのような「責任ある大国」としての理想的な状態を今後も維持できるかどうかである。上記五つの要素における過去の経緯を踏まえれば、インドの信頼できる行動には一貫性があり、インドは今後もこの理想的な状態を維持し、最終的には国際社会の中でいい意味で「責任ある大国」としての役割を果たす可能性があると考えられる。

付記

長尾賢：2011年学習院大学大学院政治学研究科より課程博士取得。2012年4月現在海洋政策研究財団研究員。本稿は2011年9月のインド・ティルパティで行ったシンポジウム“India in the Asian Century: Expectations and Impediments”における発表を元に翻訳、情報の更新、加筆、修正したものである。

註

- 1 防衛省『平成23年度防衛白書 日本の防衛』(http://www.clearing.mod.go.jp/hakusho_data/2011/2011/index.html) 第I部第2章第3節2 (最終確認2012年2月7日)。
- 2 同上。
- 3 同上。
- 4 同上。
- 5 同上。
- 6 Phillip C. Saunders and Ross Rustici, “Chinese Military Transparency: Evaluating the 2010 Defense White Paper,” Institute for National Strategic Studies, National Defense University, *Strategic Forum*, No.269, July 2011, *Web Source*: <http://www.ndu.edu/press/lib/pdf/StrForum/SF-269.pdf> (accessed on 7 February 2012).
- 7 Stephen P. Cohen and Sunil DasGupta, “Arming without Aiming: India’s Military modernization”, Brookings Institution Press, 2010.
- 8 “Pakistanis ‘put religion first’”, *BBC*, 15 September 2005, *Web Source*: http://news.bbc.co.uk/2/hi/south_asia/4246054.stm (accessed on 7 February 2012).
- 9 ゴードン・A・クレイグ、アレキサンダー・L・ジョージ著、木村修三／五味俊樹／高杉忠明／滝田賢治／村田晃嗣訳、『軍事力と現代外交—歴史と理論で学ぶ平和の

- 条件一』220 ページ (Gordon A. Craig and Alexander L. George, *Force and Statecraft: Diplomatic problems of Our Times Third Edition*, Oxford university Press, 1983, p.196)。
- 10 防衛省「平成 23 年度以降に係る防衛計画の大綱について」(2010 年 12 月)、(<http://www.mod.go.jp/j/approach/agenda/guideline/2011/taikou.pdf>)(最終確認 2012 年 2 月 7 日)。
 - 11 防衛省『平成 23 年度防衛白書 日本の防衛』(http://www.clearing.mod.go.jp/hakusho_data/2011/2011/index.html) 第 I 部第 2 章第 5 節 3 (最終確認 2012 年 2 月 7 日)。
 - 12 Australian Government Department of Defence, *Defending Australia in the Asia Pacific Centuries: Force 2030: Defence White Paper 2009*, p.64, *Web Source*: http://www.defence.gov.au/whitepaper/docs/defence_white_paper_2009.pdf (accessed on 7 February 2012).
 - 13 Rajat Pandit, “India to help train Vietnam in submarine operations”, *The Times of India*, 15 Sep 2011, *Web Source*: <http://timesofindia.indiatimes.com/india/India-to-help-train-Vietnam-in-submarine-operations/articleshow/9987596.cms> (accessed on 7 February 2012).